

福井の幕末明治 歴史秘話

<第31号>

平成29年9月21日発行

幕末の四賢侯 松平春嶽と土佐藩主・山内容堂の関係

幕末期、幕政に大きな影響を持っていたと言われる4人の大名、四賢侯。今回は、その中でも、土佐藩主・山内容堂と福井藩主・松平春嶽の関係を紐解きます。



山内容堂肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

山内容堂は、文政10(1827)年、土佐藩主山内家の分家の長男として生まれました。第13、14代藩主が相次ぎ急死したことから、嘉永元(1848)年、第15代藩主となり、藩政改革に取り組んだのち、幕政にも関わっていき、将軍・徳川慶喜に大政奉還を建白したことで知られています。容堂が心を許し信頼した人物、それが松平春嶽でした。春嶽と容堂は、お互いに切磋琢磨し、何でも言い合える仲で、春嶽は、容堂の率直さを、容堂は、春嶽の誠実さを認め、信頼し合っていたといえます。

安政4(1857)年10月、春嶽と容堂は福井藩江戸上屋敷で開催された大学講会において初めて会います。後日、第二回の会合が開かれ、容堂について福井藩士・橋本左内はこう記しています。“議論は鋭く、いずれの人も圧倒された様子。公は、計らずも自分をよく理解してくれる友を得たと大いに喜ばれた”春嶽は、これ以後、容堂を同志として信頼し、将軍の後継者問題で慶喜擁立に奔走していきました。

しかし、安政5(1858)年4月、井伊直弼が大老に就任。徳川慶福(後の家茂)が将軍となります。春嶽と容堂は隠居・謹慎となりました。その後、直弼が桜田門外の変で討たれると、文久2(1862)年7月、春嶽は政事総裁職に就任します。容堂は、幕政の中枢に進出した春嶽に対して、“容易ではない、大がかりな仕事には、ゆったりと構えなければなりません。常に心には「閑」の文字を持ち続けることが大切”と進言。春嶽の性格をよく知る容堂は、重責を担う春嶽に対して余裕の心構えを持つ大切さを説いたのです。春嶽の性格は、謹直・誠実・几帳面で、一方、容堂は情熱のまま率直に行動する性格でしたが、これがかえって調和し、終世変わらぬ盟友となったのです。

慶応3(1867)年10月に大政奉還、12月に王政復古の号令が発せられた後に開催された「小御所会議」において二人が支え合うエピソードが残っています。徳川家の処分が問題となり、慶喜の辞官・納地を求める岩倉具視らと春嶽、容堂らが対立しました。容堂は、今まで功績のある慶喜を出席させないことを非難して“3、4の公家が幼い天皇をもちたてて、権力を盗もうとしているだけだ”といきり立って大声で叫びました。これに対して岩倉具視は“無礼千万ですぞ”と一喝。春嶽は“しっかり公議をつくすためにも容堂殿の意見を取り入れて慶喜をこの席に召されたい”と容堂に助け船を出したと言われています。

容堂が残した言葉“一橋の英明、春嶽の誠実、それに我が果断を加わえて、天下の事を決すべし。”これはまさに、春嶽を信頼し、国政に関わった容堂の道標となっていたのかもしれない。

<参考資料>人物叢書松平春嶽、人物叢書山内容堂(吉川弘文館)

～幕末ふくい歴史紀行～ [春嶽と容堂が出会った福井藩江戸上屋敷跡]

春嶽と容堂が出会った福井藩江戸上屋敷跡は、現在の千代田区大手町にあります。周辺には案内板や銅像などがあり当時の面影をしのばせています。また、江戸東京博物館には、江戸時代の初期の上屋敷の模型が展示されています。模型を見れば当時、福井藩がいかに勢威を誇っていたかがよくわかります。

【場所】東京都千代田区大手町2丁目(都営地下鉄大手町駅下車、徒歩5分)



★幕末明治福井150年記念関連事業 杉田玄白没後200年記念事業「記念式典・酒井シヅ氏講演会」

来年正月に放送されることが決定したNHK正月時代劇「風雲児たちー蘭学革命篇ー」や大河ドラマの医事考証を務める順天堂大学名誉教授・酒井シヅ氏を講師にお招きし、杉田玄白先生の没後200年となる節目に、その功績についてお話いただきます。

【日時】9月30日(土)13:30～ 【場所】小浜市働く婦人の家(小浜市大手町) ※入場無料・申込不要